

# 「屍の街」の成立について

渡 辺 春 美

## はじめに

大田洋子の「屍の街」は、原民喜の「夏の花」や、峠三吉の「原爆詩集」とともに原爆を扱った文学作品の代表的なものの一つである。しかし、今日における評価は低く、手に入れることも困難な状態にある。そのような評価が正当なものかどうか、私なりに考えたと思った。「屍の街」は、書き上げられた後も、プレス・コードの影響のもとに長く出版することができなかった。その事情を抜きにして考えることはできないと思われる。私は、まず成立事情をまとめることから始めたいと思うのである。

## (一)

大田洋子は、一九四五年、八月六日に広島市白島九軒町で被爆した。難を逃れた大田は、猿猴川の川原で三日間野宿した後、佐伯郡玖島町に逃れ、「屍の街」を執筆した。逃れゆく途中、街中で妹と交わした会話の中で、すでに大田は「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの。」潮文庫版「屍の街」P74、以下特に断らない限り潮文庫版と述べている。「屍の街」はその結実であった。

しかし、大田はそこで述べた「作家としての責任」において「書かなくてはならない」ということの意味を、後に大田が意識したように明確に意識していたのではなかった。大田は、被爆後、最も早い時間に書いた「海底のやうな光——原子爆弾に遭って」（朝日新聞一九四五年八月三〇日）の中で、「広島市が一瞬の間にかき消え燃えただれて無に落ちた時から、私は好戦的になった」と述べている。また日本民族の精神性を強調して、「六日、そして七日八日、その間に見た現実、この世のほかの絵巻であった。私はそれを凄惨だつたとは思いたくない。危険と忍耐と、純粋な民族感への満ち足りた感情との三日間乞食のように河原に起き伏した短い日、私たちはどんな貴族よりも高い精神の中に呼吸していた。」と述べる。そこでは、大田は、被爆の惨状を惨状として書き記すのではなく、「凄惨だつたとは思いたくない。」とすることによって、自己のナショナルリズムに引き寄せて書き記すのである。

しかしながら、現実が「この世のほかの絵巻」である以上、大田の考えは検討されねばならなかったであろう。もともと、大田が「好戦的になった」と書き記し、民族の精神性を強調したのは、「一方的に強烈な力で押しつぶされ」（P57）た者の怒りや、「絶対の弱さや、やる瀬なさ」（P7）、「屈辱的」（P8）な思いや「耐えがた

い敗北」(P 63) 感の裏返しとしての自己実現の思いが早急に形を得ようとしたことに因つたのであろう。それが大田の中のナショナルリズムと結びついたものと思われる。大田は書くことを通して、そのような考えを検証して行つたものと思われる。ここで書くとは、見たものを見たものとしてことばに換え、その意味を過去から未来への時間の広がりの中で考えるところであり、そのようにして原爆の全体をとらえようとすると言ふことである。

それは、容易なことではなかつたであらう。が、大田はそれを成した。「屍の街」の中で、書くことの意味を次のように述べている。

「原子爆弾を征服するのも世界の誰かが考えるだらう。原子爆弾を負かすものが出来ても、戦争は出来るにちがいないけれども、それはもう戦争ではない。いっさいを無に還す破壊である。破壊されなくては進歩しない人類の悲劇のうえに、いまはすでに革命のときが来ている。破壊されなくても進歩するよりほか平和への道はないと思える。今度の敗北こそは、日本をほんとうの平和にするためのものであつてほしい。

私がさまざまな苦痛のうちこの一冊の書を書く意味はそれなのだ。」(P 135)

屈折した表現になっているが、つづめて言えば、平和のために書くということである。「人類の悲劇」を無くすために、「いっさいを無に還す破壊」を招かぬために書くというのが、大田のつかみ得た書くことの意味であつた。

五年後の一九五〇年五月に書いた「屍の街」(冬芽書房版、以下「冬芽版」と略す)の「序」で、大田は「広島不幸が、歴史的な

意味を避けては考えられないことを思うとき、小説と言えども、虚構や怠惰はゆるされぬ。原型をみだりに壊さず、真実の裏づけを保つて小説に移植されるべきであらう。そして書かなくてはならないことだけが、うごかし難いものだと思ふ。」と書いている。被爆後五年の間に世界情勢は大きく変化した。既に原子爆弾は米ソによつて保持されており、しかもその二大国を中心に世界は二つの陣営に分れ激しく対立していた。言わゆる冷戦の激化の時代である。この「序」を書いた五月は、朝鮮戦争前夜と言ふべき時でもあつた。このような状況の中で、大田の書くことの意味は、一層明確なものとして意識されたものと思われる。

とは言え、ただそれだけによつて書かれたと考えるのは妥当ではないだらう。作家が一つの作品を書く場合、様々な思いが複雑に交錯しているのが普通である。平和のために書くという思いとともに、先に述べた、原子爆弾に対する怒りや、自己回復の思い——それは自らの生をねじ曲げたものの全体を抱えたいとする思いでもあるだらう——もまた、大田を「屍の街」執筆に向けて突き動かしたものであつたであらう。

大田は「死の影を負つたまま」(冬芽版序)の状態の中、このような思いに支えられ、突き動かされて「屍の街」を書き上げていったものと思われる。

## (二)

このようにして書き上げられた「屍の街」は、しかし、長く刊行されなかつた。占領軍の言論弾圧によつて、それは曲折した経過を

経て刊行の運びとなった。大田は、その時の事情を「冬芽版」の序で、「屍の街」は個人的でない不幸な事情に、戦後も出版することが出来なかつた」と書き記している。

大田の言う「個人的でない不幸な事情」とは、一九四五年九月一日に連合軍最高司令部によって交付されたプレス・コードに基づく言論弾圧のことである。プレス・コードは、前文で「新聞に対する制限ではなくして、自由な新聞のもつ責任とその意味を日本の新聞に教えこむため」のものであると述べてあつたが、事実に基づいた報道、編集上の私見の払拭、宣伝の排除を規定していたほか、連合軍の動静の報道および批判を禁止していた。占領軍は、このプレス・コードに基づき、占領軍にとってつごうの悪い記事の公表を禁じ、違反者は軍事裁判に付された。原爆に関する報道に対しては特に嚴重であつた。松浦総三氏は、「占領下の言論弾圧」の中で、アメリカが、原爆関係の報道が資料としてソ連に伝わることを恐れたという理由をあげ、「占領下の言論・表現の自由の弾圧の中で、米軍がいちばん神経をつかつたのは、原爆に関する事項だつたと思う」(P.195)と述べている。

占領軍のプレス・コードにより「屍の街」が長く出版出来なかつた事情については、江刺昭子氏、長岡弘芳氏の調査に詳しい。それによると、大田は一度四六年早々に中央公論社に原稿を持ち込んだ。大田は一九三九年に中央公論社が募集した懸賞小説に「海女」を投稿し入選しており、その縁をたよつてのことであつた。しかし、プレス・コードによる事前検閲が行われていた時期であり、中央公論社の「中央公論」編集長の畑中繁雄氏は「いまの情勢では掲載は無

理」と判断し、見送りとなつた。大田は、その後各方面に出版を働きかけが、いずれも徒勞に終つた。それはばかりか、翌四七年には、どこで聞きつけたのか「屍の街」について占領軍の追及を受けることになつた。その時の事情は、「山上」(一九五三年五月「群像」)に詳しい。

こうした事情を経て、再び四八年に「屍の街」は中央公論社に持ち込まれた。その時期はプレス・コードもゆるやかになつており——四八年七月に事後検閲に変わった——、当時の中央公論社長嶋中雄作氏の決断で出版される運びとなつた。

この時、「屍の街」は「屍の街」という題を冠せられていたのではなかつた。長岡弘芳氏は生原稿を調べ「さて三枚目から本文に入る。と冒頭の二行に、△屍の街・塚□の村√と書かれた題名が、丹念に消されていて、上段欄外に△題は「屍」だけでも可√と大田自筆の指定があり、その△だけでも可√が消されている」(大田洋子ノート「屍の街」の原稿について)VI KING 330)というところから、「ひろしま」、「屍」、「屍の街・塚□の村」と少なくとも三つの題があり、その中から「屍の街」に落ち着いたことが知られると結論している。これは、江刺昭子氏の調査の中で、長谷川鑑平氏が答えた「題の候補は三つぐらいあって、その中から「屍の街」を選び出した」ということば(一九七五年三月一八日中国新聞「屍の街」と占領軍の言論弾圧)とも符合合している。

### (三)

このようにして出版された「屍の街」であつたが、これは大田の

意を満たしたものでなかった。「冬芽版」の「序」で大田は次のように述べている。

「『屍の街』は二十三年の十一月に一度出版された。しかし私が大切だと思う箇所がかなり多くの枚数、自発的に削除された。影のうすい間のぬけたものとなった。」

「私が大切だと思う箇所がかなり多くの枚数、自発的に削除された」とあるのは、プレス・コードの影響による。しかし、どの部分が削除されたのであるうか。中央公論社版（以下「中公版」と略す）の一年半後に出版された「冬芽版」と比較すると、そこにはかなりの差異がある。大田は、「冬芽版」を出版するにあたって、「屍の街」の全般に互りかなり手を入れている。その中で最も大部に渡って削除されているのは「無欲顔貌」の章（潮文庫版の節5・6・7・8・9にあたる）である。

この「無欲顔貌」の章の削除について、江刺氏は長谷川氏の、「あの章は新聞記事の抜粋がほとんどで数字が多く、それだけアクチュアリテイが強くなるので、削除してもらえないだろうか、そうでないと出版に踏みきれない。GHQがこう書けということと直すと、かえって作品が歪（ゆが）められることになるからと」いうことで納得してもらいました。それに、あそこに出て来る数字に疑問が持たれていたということもあります。地方新聞の記事だから過少評価していたということですか。しかし、その他のこまかい文章を書きなおさせたり、こっちで表現を変えたりしたことはありません」（中国新聞、同上）

ということばを引き、「プレス・コードを慮った出版社側の自主規

制で『無欲顔貌』の章が削除されたというのが事実のようである」と述べている。それによると、①「新聞記事の抜粋がほとんどで数字が多く、それだけアクチュアリテイが強くなるので、GHQの検閲にかかるおそれがあるのではないか、②出てくる数字が地方新聞の記事だから信頼性にかける——実際は、広島県当局が人的被害を内務省に報告した数字（「大田洋子ノート『屍の街』の原稿について」長岡弘芳・VIKING 330）——という中央公論社側の判断によって削除されたということになる。

「無欲顔貌」の章を除くと、プレス・コードの影響として削除されたと考えられるものはほとんどない。わずかに次の箇所が注意を引きはする。

「しかしS先生、俺はひとつだけふしぎなことがあるよ。戦争は日本が大敗け喰って、それで終ったんだろう？とにかく戦争はこの間すんだんだね。そのくせ俺たちは戦争のために死んで行くんだぜ。戦争がすんでもまだ戦争のために現にこうやって死んで行くんだね。そいつが不思議なんだ。」（P22）

「冬芽版」にあって「中公版」にないこの箇所は、栗原貞子氏の「中国文化」創刊に関する事情を考えると、あるいはプレス・コードの影響であるかもしれない。この「中国文化」創刊号は、一九四六年三月十日に原子爆弾特集号として発行されたものである。事情というのは、創刊に際しGHQの指示通り、事前検閲を受けたにもかかわらず、印刷後に再び呼び出され、今後の注意として「原爆の惨禍が原爆以後なお続いているという表現は如何なる意味でもしてはならない」と嚴重に言いわたされたというものである。（核・天

皇・被爆者」P 49～P 50三一書房・栗原貞子

しかし、「屍の街」の冒頭が、原子爆弾の後遺症によって人々が次々と死んで行くという描写に始まっていることや、同様の「するどだしぬけに、二十日を過ぎて間もなく、広島から来ていた戦災者たちが、はじめの章に書いたような原子爆弾症に侵されては、次々と死にはじめたのだった」(P 12)という表現があることを考えると、プレス・コードによって削除されたものではなく、「冬芽版」に後に付け加えられたものと考えの方が妥当であろう。

先に引いた長谷川氏によると「その他こまかい文章を書きなおさせたり、こつちで表現を変えたりしたことはありません」ということである。しかし、プレス・コードによる弾圧を考え、洋子自身が自主規制した箇所はないのであろうか。

大田は、「生き残りの心理」(一九五二年十一月、改造臨時増刊号)で次のように述べている。

「私はもっと早く、不安神経症を発病していたのかもしれない。長編『人間檻籠』を書いている途中から、書き終ったあとにかけでじつにくる休めてたまらなかつた。文学はそれ自体、苦闘である。原子爆弾の体験というような、あらゆる生物のなにものも体験してはならない極端に異状なことを体験した本人の作家が、運命とはいえ、それを書かなくてはならない立場に立ったことの苦悩。その作品を書くのに、つねにつきまとう抑圧感、アメリカのやり方への批判はむろんのこと、最初の原爆投下が、極東征服の一段階であるとする考え方も、占領下では書きたくても書けなかつた。自分の書きたい方向を抑え抑えして、現に書きつつあるも

のを思わぬ方向にゆがめてしまった。」

やや感情の昂ぶりの見られるこの文章の中で、大田は、「アメリカのやり方への批判はむろんのこと、最初の原爆投下が極東征服の一段階であるとする考え方も、占領下では書きたくても書けなかつた」と述べる。そればかりか、「現に書きつつあるものを思わぬ方向にゆがめてしまった」と言う。ここで「現に書きつつあるもの」というのは、やや文脈を押し難い文ではあるが、「人間檻籠」を指しているものようだ。しかし、四九年九月には事前検閲も一部の雑誌を除き廃止され、「人間檻籠」を書いた一九五〇年から五年の時期は、弾圧が強化されたが既にソ連も原子爆弾を保持しており、それほどの占領軍による弾圧が原爆に関するものに対してあつたとは思われない。むしろ、「屍の街」を書き、その出版に苦しんだ時期の方が、弾圧は格段に厳しかったと思われる。とすれば、大田の側が「屍の街」に対して行った自主規制についても検討されなければならぬだろう。

考えられるのは、①長岡氏は「中公版」のための原稿以前に書かれた「屍の街」の原稿があると考えておられるが、それがあつたとして、大田は「中公版」のためにその原稿を書き改める過程で自主規制した、②「中公版」と比較した当の「冬芽版」自体を自主規制した、の二つの場合であろう。しかし、「冬芽版」が最終的なものとして出版された以上、③を検討することで十分と思われる。(注、河出書房版は章題が削除されているだけで「冬芽版」と同じ、潮文庫版は河出書房版によつてゐる。

果して、大田は「冬芽版」において自主規制したのであろうか。

結論から先に述べれば、自主規制したとは考え難いということである。そう考える理由として次の四点を挙げる。

①長谷川鑑平氏によると「『屍の街』は、表現は緩和したりなどあまりしてもらわなかったが、被害状況の数字にわたるところは、割愛してもらった。著者はせひ現実をつきつけて世界に訴えたいと、なかなか承知してくださらなかったが、あえて割愛してもらった」(『本と校正』中公新書P104)ということである。「被害状況の数字にわたるところ」というのは、前述した「無欲顔貌」の章のことである。ここで大田は「せひ現実をつきつけて世界に訴えたい」と望んでおり、そのような強い姿勢を考えると自主規制したとは考え難い。

②「山上」によると、一九四七年に大田は、「屍の街」を書いたために占領軍の調査を受けた。アメリカ兵が「広島の出来ごと」はわすれていただきたい」と言うのに対し、大田は「わすれることはできないと思います。」「市民としては忘れたいと思っと思っていますが、わすれるということと、書くことは別です。」「わたくしは発表できなくても、書かないわけには行きません」と述べる。

さらに「忘れていただきたい」と述べるアメリカ兵に大田は憤り、「日本で発表できないければアメリカへプレゼントします」と述べる。ここに見られる姿勢からも自主規制したとは考え難い。

③「冬芽版」の「序」において、「読者は私の書き方をもの足りなく思われるであろう。私自身五年経ったこんにち、読み返して見て意に満たぬ多くのもどかしさを感じている。そして私の書き得なかつた広島、当時の様相を眼底に思い浮べ、私の魂自体が

焔の中で煮詰まるほどの、肉体的な、精神的な苦痛を覚えるほかはない」と述べている。「序」にはこのような類の表現が随所に見られるが、そこには惨状を描き得ぬ苦しみはあっても抑圧感はない。

④潮文庫版「屍の街」の解説で小田切秀雄氏は、「冬芽版」を「初刊本から削られていたのをすべて復活した」完全な形のもの」としている。氏にお訊ねしたところ、「検討すべきことではあるが、本人からそう聞いた」との返事を頂いた。このことから自主規制したとは考え難い。

それでは、「生き残りの心理」の自主規制に関する表現をどう考えればよいのだろうか。大田に抑圧感があったことは確かであろうが、それは「最初の原爆投下が、極東征服の一段階であるとする考え方も、占領下では書きたくても書けなかった。」という考えを、当初から持ち得ていたということを示すための大田一流の表現だったのではないかと思われる。例えば大田は「中公版」から「冬芽版」にかけて次のように書き改めている。「戦争は―筆者注―もう長くて三カ月ね」→「もう長くて二カ月ね」、「終戦の哀しみは、(略)勃発の日すでにうまく行って五分五分に、ことによつたらめちやめちやに」→「戦争の苦しみは勃発の日すでにわかつていたのだ。」これは認識の変化というよりも、自己を戦争の当初から、成り行きのおおよそを察していた醒めた眼の持ち主として示そうとしたものであろう。「生き残りの心理」の引用文はこのようなものとして考えられる。

以上のことから、プレス・コードによる影響は、出版社側の判断

による「無欲顔貌」の章の削除以外にはなかったと考えるのが妥当と思われる。

(四)

「冬芽版」は、一九四九年八月に各誌に発表された「八月六日八時十五分」〔改造〕後に「一九四五年の夏」に改題、「いまだ癒えぬ傷あと」〔婦人〕、「原子爆弾症」〔女性改造〕の三編を併せて収録し、一九五〇年五月三〇日に発行された。プレス・コードによる検閲は、事前事後とも、一部の雑誌を除いて一九四九年九月には表面上廃止されていたが、五〇年六月二五日に朝鮮戦争が勃発すると再び弾圧が強化され、いわゆるレッド・ページが強行された。「冬芽版」はこのような時期に出版されたのであった。

大田は、「冬芽版」出版に際し全般に渡ってかなり手を入れていく。それは「無欲顔貌」の章を除いても六〇〇箇所以上にもなる。このようにも大部に渡る推敲がどのような観点から成されたのであろうか。その主なものを次に類別して挙げることにする。

㉔より詳しく正確にしたもの。効果的に語を補ったもの。

なんのこともわからなかった。→なんのために自分たちの身のまわりが一瞬の間にかんなに変わってしまったのか、少しもわからなかった。P 47 そういふときはいろんな感慨のため自然に涙が流れるのだった。→そういふときは戦争の残酷さがひしひしと胸にこたえ、自然に涙が流れるのだった。P 121 沈黙なんぞ光沢がなく→沈黙なんぞ理解される苦がなく、P 133 ㉕無駄な語を除き簡潔にしたもの。

季節の切ない美しさは→季節の美しさは P 7 このことはとも面白く思えた。→このことは面白く思えた。P 114 蒼白いきれいな顔をした少年は→蒼白い顔をした少年は P 122 精神はますます鋭くなる→精神は鋭くなる P 155

㉖接続詞・接続助詞を改めたり省いたりしたもの。「くけれど(も)」を「が」にしたものが多い。

いっしょに暮らしていたけれども→いっしょに暮らしていたが P 8 けれども、大雪のふる日の広島を→大雪のふる広島を P 40 虚飾ではなくて→虚飾ではなく、P 81 ㉗文末の表現を書き改めたもの。

広い三角州であったのだろう。→広い三角州であった。P 38 人がいたのであるうと思う。→人がいたと思う。P 41 田舎へ届いたそうであった。→田舎へ届いた。P 83

㉘助詞(特に格助詞)を改めたもの。

眠ることはできなかった。→眠ることができなかった。P 43 空襲ではないのかも知れない→空襲ではないかも知れない P 47 はもう乾いて→血ももう乾いて P 51 ㉙プレス・コードによって削除したものを復元したもの。

「無欲顔貌」の章全部(略)

㉚認識の変化によるもの。

ひとつの部公の人口の半分以上が、一日に死んだからと思われほどの出来事に対して当局の頭脳はあまりに貧しくありすぎた→……出来事に対し、またそれが戦争によるものだとということに対して当局の頭脳はあまりに貧しすぎた P 133 国家の無智に

↓帝國主義の無知に P 154

①敬語表現の除去

お嬢さん↓娘 P 45 お宅↓家 P 48 お節↓お萩 P 119 首  
だけを出していられたが↓首だけを出していたが P 132 いっし  
よになられた↓いっしょになった P 139

②中流意識からの脱皮

私は青い絹の傘をひらいた↓私は青い傘をひらいた P 56 ……  
…ちっともなかった。中流階級らしい落ちつきや知識人の集まり  
らしい理性などでやさしくしたり、↓……ちっともなかった。  
やさしくしたり… P 69

以上に類別し、例を挙げたが、ここに挙げたのはほんの一例に過  
ぎない。類別できなかつたものも多く、さらに詳しい検討がなされ  
なければならぬだろう。しかし、以上によって大田がどのように  
推敲したかは伺い知ることができぬ。

大田は、先ず「無欲顔貌」の章を復元した。さらに④⑤に見られ  
るように、広島島の惨状を、より詳しく正確な、しかも簡潔で引き締  
まった文章で効果的に表現しようと努力した。④⑤の推敲も、より  
引き締まった文章にするために成されたものと考えてよいだろう。  
また、⑥は、書くに考ふる過程で得た認識を表現したものである。

⑥の敬語表現の除去は、事実を事実として表現する文章にふさわし  
く、文章を簡潔にするのにも役立っている。それは、また④に見ら  
れる大田の中流意識からの脱皮を反映したものであるのだろう。

## (五)

「中公版」、「冬芽版」には、各章ごとに章題がつけられている。  
「鬼哭啾々の秋」(1・2・3・4節、冬芽版)、「無欲顔貌」(5・  
6・7・8・9、中公版は削除)、「運命の街・広島」(10・11・12  
・13・14・15)、「街は死の襦袢筵」(16・17・18・19・20、中公版  
では「街は死の襦袢筵」、「憩いの車」(21・22・23・24・25・26)、「  
風と雨」(27・28・29、中公版では「酷薄な風と雨」、「秋晩の琴」  
(30、中公版では「晩秋の琴」、冬芽版は誤植と思われる)というも  
のである。この章題は、河出書房の市民文庫版「屍の街」以後は削  
られており、潮文庫版にもない。

章題を削除した事情に関して、小田切秀雄氏は、「一見きわめて  
どぎつい題がつけられていたのになんか、敗戦以前のこの作家  
の作品をいくらかでも知っている者は、この作家の必ずしも文学的  
とはいえなかつた傾斜の側面と結びつけて、一種の抵抗感をもつた  
に相違ない」、「それでのちに作者は各章ごとの題を取ってしまった」  
(潮文庫版「屍の街」解説 P 235 ~ P 236)と述べている。各章ごとに  
つけられた「一見きわめてどぎつい題」は、大田の「一種の我中心  
主義ふうの傾斜」(同)と結びつけて受け取られ、かえって広島島の  
惨状を理解することを困難にしている。そのことを知って、題は大  
田が取り去ったということである。

大田が、「一種の我中心主義ふうの傾斜」によって反感を買って  
いたことを十分に知っていたかどうか明らかではない。しかし、ど  
ぎつい題がかえって広島島の惨状をありのままのものとして理解する  
ことを困難にしているということについては気付いていたものと思  
われる。

「冬芽版」出版のための推敲の過程で、大田は無駄な語を省き文を簡潔なものにしようと努めている。そうすることによって文を押さえ引き締め、表現初果を上げようとしたのである。省かれたものには、「とても」・「ひどく」・「かすかに」・「かえって」・「ますます」・「大きな」・「美しい」などの形容詞、形容動詞・副詞が多い。中でも「とても」が多いのが目立つ。谷崎潤一郎は「文章読本」の中で、むだな形容詞や副詞を多用するのは、「ちやうど、へたな俳優が騒々しい所作を演ずると同じ結果に陥」り、かえって効果を弱めるということを述べている。大田にも同じ反省があったものと思われる。

章題の削除は、このような反省の延長に立って成されたものと考えられる。

## おわりに

これまで「屍の街」の曲折した成立事情について述べてきた。論証の不備な点、独りよがり陥っている点もあるかと思う。御指摘、御教示頂ければありがたい。

さて、大田は「冬芽版」出版の後、「不完全な私の手記を償うべく、かならず小説作品を書きたい」「冬芽版」序」と述べ、「人間襁褓」の執筆に向う。そこには、「屍の街」では広島島の惨状を十分に表現し得なかったという思いや、朝鮮戦争の勃発に伴う核戦争の危機の中で広島島の悲慘がより広く知らねばならないとする思いがあったであろう。しかし、中でも被爆後数年経た後も執拗に大田を苦しめる原爆の実態を捉えたいという思いが強かったのではないだろうか。

原民喜が被爆者に深く共感し同化することによって、直感的に原爆を捉え得たのに対し、大田は人間の眼と作家の眼を区別し、作家の眼で原爆を捉えようとした。そこに限界があったのではないだろうか。原爆の後遺症は、大田の予想を越えて広がり、大田を苦しめた。自らを苦しめる物の正体をつかもうとする思いが「人間襁褓」執筆に向けて大田を動かしたとは言えないであろうか。これを明らかにすることを次の課題としたいと思うのである。

(一九八〇、一月二九日)

(大阪府立碑高等学校教諭)